

プスの薔薇」といふゆかしい名前の宿屋に落ちつく間もなく、直ぐに本野大使からの紹介状を携へて領事館を訪ねた。そこに居合せて何かと親切に世話を焼いてくれた一人が、後に、尼港で無残の最期を遂げられた當時の石田書記生君であつた。早速博物館に交渉して貰ふと、今日は祭日で休みだとのことで要領を得ない。翌日直接博物館を訪ふたがまたも休日とのことに業を煮やし、かねてペチエルブルグの露友から紹介を受けて居つた館長ボ氏に電話して面會を求めたところ、程なく先方から宿に訪ねてくれた。その話によると明日は日曜明後日は月曜で常例の閉館日だから、その翌日火曜日の十二時に来いとのことだ。その頃の露西亞は祭日の多いことが一つの名物になつて居つた位だから致方もない。

さて四日間を過して九月一日約束の時間に博物館に行つて見ると、館長はまだ來て居らぬ。館員に譯を話して、備附けの分類カードについて、片端からこの書を捜して見たがそれと思はれるものが見つからない。漸く出勤した館長に聞いて見ても要領を得ない。捜しあぐんだ二時間餘りの後失望の吐息と共に將に引き上げやうとしながら、なほ未練に別置法律部の目録のホコリだらけになつて居るのを繰つたところ、やつと似よりの名が見附かつたので、出して貰つて見ると果してそれであつた。經世大典そのものではないが、明の永樂大典の中に收められた同書の站赤門で赤野昏精寫本三冊に分れて居る。これを手にした瞬間、少しく大きいかも知れないが、自分だけには、まだ見ぬ親に巡り遭うた感じにも當るであらうかと思はれる程に、なつかしいやうな飛びつきたいやうな氣持がして、晝の食事などは忘れて前後左右とひねくりまはした。三時の閉館時間までに、兎も角もと二枚半を寫し取つたことを日記に記して居る。